

## 会 告

二〇一八年度史学研究会大会および総会は、一月二日（金）午後一時より、京都大学国際科学イノベーション棟五階シンポジウムホールにおいて開催されました。

公開講演は、井野瀬久美恵、吉本道雅の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終了いたしました。

「帝国だったイギリスの過去」と向き合う——一九八八〜二〇一八、激変する研究動向と環境のなかで——

井野瀬久美恵氏

前四世紀中国における歴史認識の変容——時代区分としての「春秋時代」の出現——

吉本 道雅氏

なお、大会に先立って開催された定例の理事会・評議員会および総会において、二〇一八年度会務報告が行われ、

原案どおり承認されました。

## 二〇一八年度史学研究会大会講演要旨

「帝国だったイギリスの過去」と向き合う

——一九八八〜二〇一八、激変する研究動向と環境のなかで——

井野瀬 久美恵

私が大学の教壇に立った一九八八年から現在に至る三〇年の間に、イギリス帝国史研究は、テーマも対象も、アプローチもスタイルも様変わりした。IT革命によって、史料のありかやその探し方が変わっただけではない。一九八九年以降の冷戦体制崩壊と相まって、近代を牽引してきた「大きな物語」が終わり、抑えつけられてきた「小さな物語」が噴出した影響もある。だが、それ以上に顕著な変化は、この三〇年間ににおける「帝国だった過去」への揺り戻し（バックラッシュ）であろう。

私が大学院生だった一九八〇年代、イギリス帝国史は危機の時代にあった。脱植民地化のプロセスのなかで、イギリス帝国史

は独立後の各国史に変わり、欧米の大学カリキュラムでは「エリアスタデイーズ」に名を変えて、いずれにしても解体された。その状況は、マザーグースに登場する謎のキャラクター、壁から落下して誰にも元に戻せなかった「ハンプティ・ダンプティ」にたとえられた<sup>①</sup>。同じころ、旧植民地からの大量移民流入によって多文化・多民族化するイギリス社会を、大ヒットした映画にちなんで「帝国の逆襲」と捉える研究も出された<sup>②</sup>。

解体されたはずの「帝国だった過去」への回帰が見えはじめる。二〇世紀末、ヨーロッパ史家のノーマン・デイヴィスは、帝国消滅後の連合王国の解体を予測した<sup>③</sup>。二一世紀の「帝国の逆襲」は、イギリス（国内）史を考えるうえで帝国の存在とそのインパクトを無視できないとする「新しい帝国史 new imperial history」<sup>④</sup>の動きに明らかである。

帝国史への回帰には、同時期の歴史学の研究動向やアプローチの変化が関わっている。民衆に注目した「下からの歴史」、クリフォード・ギアーツら人類学の文化解釈、ポストコロニアリズム、カルチュラル・ス

タデイーズ。さらには、「言語論的転回」以降、歴史学が経験したいくつかの「転回」として、「帝國的転回 imperial turn」も位置づけられよう。そのなかで、歴史研究者は「歴史的事実とは何か」をますます自覚的に問うようになり、同一の出来事を見る複数の視点・視線を意識するようになった。それが「帝国だった過去」を見る目を大きく変えたことは、何よりも帝国史の叙述変化に認められる。

J・R・シーリーの『イングランドの拡大』（一八八三年）にはじまり、ケンブリッジ版帝国史シリーズ（一九二九―五九年、全八巻九冊）に受け継がれた白人入植地中心の叙述は、二〇世紀末のオクスフォード版帝国史シリーズ（一九九八―九九九年、全五巻）で大幅に修正された。とはいえ、世紀でまとめるといふ編集スタイルでもはや帝国史が回収できないことは、二〇〇四年以降、黒人やジェンダー、宗教といったテーマ別の補完版（Companion Series）がすでに一五巻を数えることから明らかだろう。一九八四年に始まったマンチェスター大学出版局の「帝国主義研究 Studies in Imperialism」シリーズは、三〇年ほどで

一四〇冊を超え、イギリス帝国への高い関心とテーマの多様化を伝えてくれる。

と同時に、「帝国だった過去」への回帰は、現実の国際政治の動きとも連動していた。マンチェスター大学出版局シリーズが、帝国へのノスタルジアを示したフォークランド紛争の二年後に始まったことも、けっして偶然ではない。二〇〇三年、ケニア独立四〇周年を機にマウマウ（キクユ人を中心とする反英独立運動）関係者復権の動きが始まったように、二一世紀が進むなかで、脱植民地化の意味とその具体的な形が見やすくなったことも、帝国史への回帰を加速化したと思われる。二〇一二年、元マウマウ闘士らが、捕虜収容所で受けた虐待に対する補償を、ケニア政府にはなく、イギリス政府に請求し、それをイギリス高等裁判所が合法と判断した背景には、「帝国だった過去」と二一世紀の現実（たとえば、イラク戦争の捕虜を収容したアブグレイブやグアンタナモにおける虐待）との重なりも指摘できるだろう。

と同時に、マウマウ闘士らの証言を裏付けるべく、（存在しないとされてきた）記録を辛抱強く追跡し、当時の植民地政府が

隠蔽した大量の植民地文書（Operation Legacy, FO14）を発見した歴史研究者の貢献は大きい<sup>⑤</sup>。その一方で、歴史的謝罪や和解と関わる「歴史戦争（History Wars）」のなかで、「帝国だった過去」が政治利用される可能性にも、研究者は目配りする必要がある<sup>⑥</sup>。

一つの歴史的事実を見る目は、驚くほど一つではない。しかも、二一世紀のわれわれの現実には、「参照すべき過去」を探しつけている。その意味で、われわれは「予言不可能な過去」とともに生きているといつてもいい。だからこそ、歴史研究者には、何が起きていたかをより深く追求し、より豊かな理解を示す使命がある。

① David Fieldhouse, 'Can Humpty-Dumpty Be Put Together Again? Imperial History in the 1980s', *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 12, no. 2, 1984.

② Centre for Contemporary Cultural Studies, *Empire Strikes Back: Race and Racism in 70s Britain*, 1982.

③ Norman Davies, *The Isles: A History*, 1999. A.G. Hopkins, 'Back to the Future: From National History to Imperial History', *Past & Present*, No. 164, Aug. 1999.

④ eds. by Antoinette Burton & Dane Kennedy, *How Empire Shaped Us*, 2016.

⑤ Caroline Elkin, *Imperial Reckoning: The Untold*

Story of Britain's Gidag in Kenya, 2005; David Anderson, *Histories of the Hanged: The Dirty War in Kenya and the End of the British Empire*, 2005.

⑥ Stuart Macintyre & Anna Clark, *The History Wars*, 2003; 橋本伸也編『紛争やせられる過去——アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』岩波書店、二〇一八年などを参照された。

## 前四世紀中国における歴史認識の変容

——時代区分としての「春秋時代」の出現——

吉 本 道 雅

『春秋』が記述する時代をその前後と区分することは、前三二〇～前三一〇年代の『孟子』が夏殷西周・春秋・戦国を指す「三王」「五霸」「今」という時代区分に淵源する。前三七〇年頃の『左伝』や前三四〇年頃の清華簡『繫年』には、春秋時代に相当する時代区分がなお見えない。前四世紀後半に歴史認識の急激な変容が発生したのである。本発表では、この変容をもたらした政治史的背景を考える。

『左伝』は、第一の覇者である斉桓公の死後、晋文公が覇者となり、以後、定公までの歴代覇者が覇者（盟主）であったとするが、魯の同時代的年代記に由来する『春

秋』には晋文公と定公が諸侯を結集して「盟」したことが見え、この言説が春秋時代の実態に即したものであったことを証する。加えて『左伝』の覇者は周王朝の認証を受けたものであった。こうした覇者観に呼応して、『左伝』は夏殷西周のち「晋霸の時代」を想定する。晋霸は、『左伝』の編年的記述の終わる前四六八年以降も続した。魏文侯・武侯は周王朝・晋侯を奉じて晋霸を持続させたが、前三八六年以降、三晋の紛争が始まり、前三七〇年の魏武侯の死後、恵王・公仲緩の公位継承紛争が勃発した。前三六九年、周烈王の死後、周王朝は内乱に陥り、同年、趙・韓が魏の庇護下にあった晋侯を拉致した。魏が周王朝・晋侯を奉ずることで維持されてきた晋霸は、ここにその正統性を喪失した。『左伝』はその編者たる呉起の卒した前三六八年までの事件を「予言」しており、前三六九年を晋霸の終焉とみなしていた模様である。

清華簡『繫年』は『左伝』の「抄撮」を最大の原資料とし、その成書は前三四三年の魏斉講和以前、前三四〇年頃である。『繫年』は春秋から戦国前期における晋楚南北対立を主題とするが、楚を晋と対等の

覇者に見立てることは、全中国的政治秩序がなお晋霸をモデルとするものであったことを示す。それは当時の実態に即したものであった。魏が維持してきた晋霸は、晋侯拉致によってその正統性を喪失したが、魏恵王はなお實力を以て諸侯を糾合した。前三四九九年に晋が断絶すると、魏恵王は周王朝に覇者認証を求めた。これを嫌った斉・趙・韓は秦と結んだ。それに先立ち、前三六四年、秦献公は石門の戦で魏を大破し、周王朝の祝賀を受けていた。前三四三年、周王朝は秦孝公を覇者に認証した。魏恵王は王号を称して新王朝の樹立を図ったが、前三四二年、馬陵の戦で斉に大敗した。秦孝公の死後、周王朝は引き続き秦恵文王を覇者に認証したが、魏恵王は斉威王と講和し、前三三四年、相互に王号を承認することで、秦の覇権を否認した。前三二五年、秦恵文王が称王に踏み切り、覇者が周王朝を奉ずる政治秩序は終焉を迎えた。

前三二〇年代には中原諸侯が次々に王号を称し、周王朝の権威は全く否定された。孟子はこれらの王の一人が天下を統一し、新王朝を開くことを期待した。ところが現実には周王朝が存続していたので、新しい

王は篡奪者になりかねない。この矛盾を解消すべく、孟子は歴史認識の根本的な転換を主張する。まずは周王朝が厲王・幽王の時点ですでに滅びていたものとする。ついで孔子を堯舜禹・湯・文王武王周公に比擬する。孔子の登場は夏殷周三王朝の開始に匹敵する歴史の画期とされ、『春秋』は新王朝の綱領とされる。こうして厲王追放ないし幽王敗滅から孔子までが一つの時代として定立される。孔子の『春秋』がこの時代を記述し、記述の中心は「齊桓・晋文」にはじまる「五霸」である。齊桓公および晋文公以降の歴代晋侯、魏文侯・武侯・恵王、秦献公・孝公・恵文王など春秋期以来の覇者ないし実質的な覇権を担った諸侯は、周王朝の認証を受けていた。ところが、孟子は、周王朝をすでに滅びていたものとし、従って覇者を認証することもありえない。覇者は他国を圧倒する實力をもちさえすればよいのである。こうして春秋期の覇権は齊・晋・秦・楚・越の「五霸」の間を移動したものとされ、さらに『春秋』による時代区分によって、それ以降の覇者の存在は抹消されることになった。

『春秋』の編年の記述の下限あたりに春

秋・戦国の画期を求めることは、現実の歴史の推移を理解する上で必ずしも有効ではない。全中国的政治秩序については、前二五五年の秦恵文王称王まではむしろ春秋時代に連続する局面を無視できない。秦漢専制国家形成の時代としての戦国時代の開始は、前四世紀末の孟子のころに降るものと考えられる。

## 二〇一八年度史学研究会大会・総会の記録

二〇一八年度史学研究会大会・総会は、一月二日（金）午後一時より、京都大学国際科学イノベーション棟五階シンポジウムホールにおいて開催された。

総会では、田中和子理事長による挨拶の後、北村昌史氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（金澤潤作常務理事）からは、役員交代および会員数の動向についての報告の後、四月二〇日（土）午後一時より京大文学部第三講義室を会場として行う来年度の例会のテーマを「病」とすることが報告された。

編集（中砂明徳常務理事）からは、『史

林』の刊行状況についての説明があった。会計（谷川穰常務理事）からは、二〇一七年度決算および二〇一八年度予算について説明があった。

広報（下垣仁志常務理事）からは、例会・大会のためのポスター作成と、ホーム・ページの管理について報告があった。以上の報告はすべて原案通り承認された。大会では、次の二本の講演が行われた。

井野瀬久美恵氏

「帝国だったイギリスの過去」と向き合う——一九八八〜二〇一八、激変する研究動向と環境のなかで——」

吉本道雅氏

「前四世紀中国における歴史認識の変容——時代区分としての「春秋時代」の出現——」

講演者紹介と司会は、それぞれ小山哲事と中砂明徳常務理事がとめた。講演内容は本号に掲載されているので参照されたい。

公開講演ののち、高嶋航理事が閉会の辞を述べて会を終了した。

（文責 中砂明徳）